

## 落葉果樹のせん定・管理

### ～ブドウ・モモ・スモモ・カキ・キウイフルーツ～

佐賀県果樹試験場 落葉果樹研究担当係 技師 児玉龍彦

#### ブドウ

H23年度のブドウ生産は露地・トンネルでは例年よりやや遅い生育で推移したものの、収穫直前の天候のおかげもあり、収穫時期は例年同様となりました。しかし、品質の面では単為結果が多く、収量も減少しています。この原因としては昨年のべと病、褐斑病での枝の充実不足、新梢数の減少によるところが大きいと考えられます。

今年は、昨年のような大発生ではありませんが、一部の園地では褐斑病の発生により早期落葉がみられました。未発生園では、収穫も早い段階で終了しているため、枝の充実には十分に進んでいると考えられます。これは早期落葉で弱った樹を回復させるチャンスですが、逆に枝の徒長化により来年度の結果枝確保の妨げになる可能性もあります。剪定の強度（強い枝は弱めに、弱い枝は強めに切り返す）などに気を付け、その後の芽キズ処理等の作業を確実にを行うことで、来年度の生産に繋げていきましょう。

#### 【剪定方法】

せん定の時期については1月上旬以降から行い、芽キズ処理については2月上～中旬頃（樹液の流動が始まる前）に行ってください。

#### ・短梢せん定

短梢せん定は、今年の結果枝を1～2芽残す単純なせん定で、非常に短時間で行えます。残す芽については、主枝上の陰芽は数えず、結果枝上のしっかり確認できる芽を2つ残すようにします。（図1）

短梢せん定を成功させる最大のポイントは、骨格ができあがった2年目に全ての芽を発芽させることです。発芽しない芽があるとその部分がはげ上がり、結果枝の確保ができなくなります。特にシャインマスカットは節間長が長く、発芽しない部分があると大きく棚面に空間ができてしまう可能性があります。芽キズ処理を必ず行い、確実に発芽させるようにしましょう。

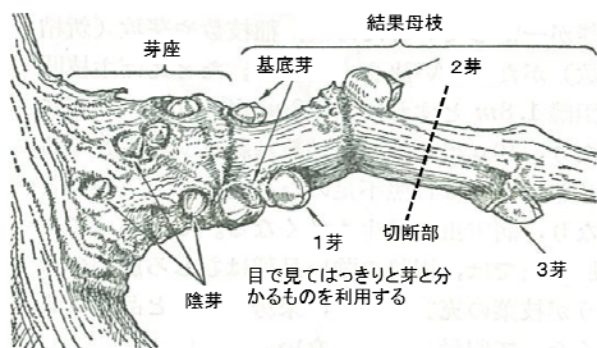
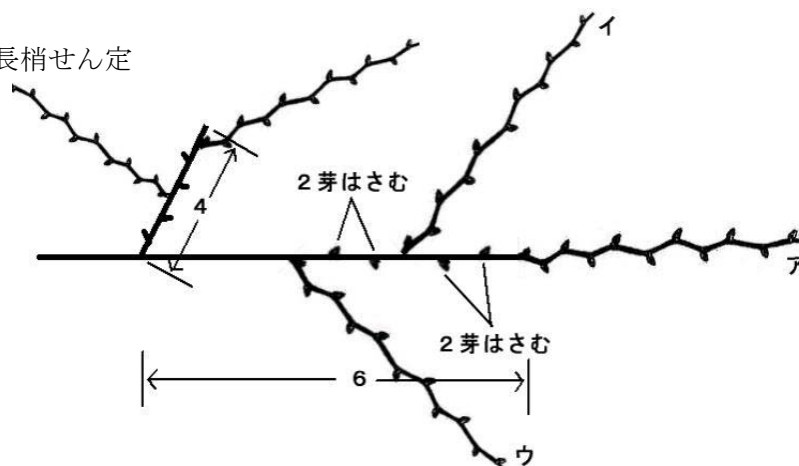


図1 ブドウの短梢せん定

## ・長梢せん定

長梢せん定にあたっては樹のバランスを考え、主枝、垂主枝、側枝を配枝し、棚面を有効に活用します。せん定の進め方は、主枝の先端から基部に向かって行って下さい。また、本年は充実した種枝が不足しているため、発芽数の不足も懸念されます。全ての芽に芽キズ処理を行い、確実に発芽させる必要があります。（図2）

図2 ブドウの長梢せん定



- ・先端の枝（ア）を決めたら、2芽（偶数芽）はさんで次の枝（イ）をおく、さらに2芽（偶数芽）はさんで次の枝（ウ）をおく。
- ・枝の切り返しは枯れ込んだ部分を切る程度に弱くする。
- ・主枝先端と2番目の側枝の枝（芽）数は、主枝：側枝＝6：4とする。さらに、3番目の側枝は、主枝先端＋2番目の側枝：3番目の側枝＝6：4とし、以下基部まで繰り返す。

## モモ

モモのせん定の時期については、12月に入ってから実施して下さい。新梢管理や秋季せん定を実施してこられた園であれば最後の仕上げ程度の簡単な作業となります。せん定を行う時は樹の状態を考慮して、樹勢を調節することを意識して鉢を入れてください。

若木または早生品種で樹勢が強い場合には、間引きせん定を中心とするべく多く枝を置いて、樹勢を落ち着かせるようにします。ただし、枝が込み合うと受光体勢が悪くなり、品質低下、枝の枯れ込み、はげあがりが発生するおそれがあるため、展葉後の状況を考慮して枝を配置して下さい（図3）。主枝・垂主枝の背面から出た徒長枝を残すと長大化して負け枝をつくるおそれがあるため剪除しますが、背面に何もないと日焼けが発生しやすくなりますので小枝は残すようにして下さい。結果枝の配置は着果位置を考慮しながら決めますが、側枝先端の枝が最も強く維持できるように選んでください（図4）。

長果枝の先端部が弱ったり、芽がついていない場合には充実した葉芽のある位置まで戻って先刈りをしてください。

定植後2、3年は樹冠拡大を優先して着果させないため伸長量も大きくなりますが、放っておくと管理のしにくい樹形となってしまいます。樹冠内の枝の強弱のバランスを考え

て枝の向きを決め、支柱で固定して誘引を行ってください。

樹勢の弱い樹については切り返しせん定を行って下垂した枝を上向きにし、なるべくコンパクトな側枝をつくるようにします。側枝が古くなった場合には、基部から発生した枝まで戻って更新しますが、基部がはげあがって更新枝がない場合には側枝周辺の発育枝を利用して更新します（図5）。樹齢が進み樹勢が弱ってくると短果枝の割合が多くなってきますが、葉数の多い長果枝を残して切り返し、新梢を伸ばして樹勢を回復させてください。

大きな切り口をつくと凍害をにあうおそれがあります。せん定後はすぐに癒合剤を塗布し、極寒期を避けて作業を行ってください。

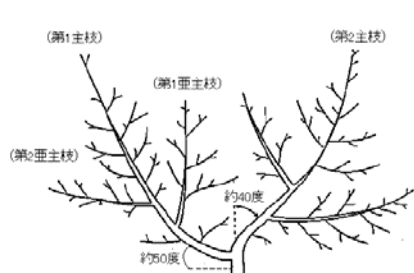


図3 モモの枝の配枝例

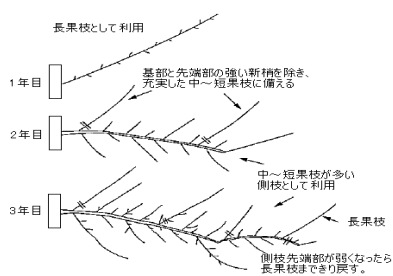


図4 モモの枝のせん定方法①

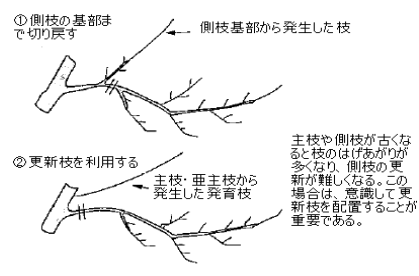


図5 モモの枝のせん定方法②

## スモモ

基本的にはせん定方法及び時期についてはモモと同様の考え方ですが、幼木時の新梢の発生が多いため、よりこまめな管理が必要となります。品種によって枝の発生、新梢伸長、結果部位などの特性が異なりますので、品種の特性に応じたせん定方法を選択してください。

### ○ソルダムタイプ

若木の時から短果枝の着生が良く、新梢の発生が少ないため樹冠の拡大が遅くなります。樹形は開帳しやすく樹勢も低下しやすいので、切り返しは強めに行なって翌年の伸長を促すような剪定方法が基本となります。

### ○サンタローザタイプ（太陽・貴陽など）

樹勢が強くと新梢の発生が多いため、剪定が強過ぎると生理落果が多く結実不良となります。樹形は直立しやすいため、幼木のうちは特に夏場の新梢管理や支柱を利用した樹形づくりが重要となります。枝の切り返しはやや弱めを基本として、新梢の先端は先刈り程度に留めて短果枝の形成を促しましょう。

### ○大石早生タイプ

新梢の発生程度はソルダムとサンタローザの中間ですが、樹形は直立しやすいためサンタローザと同様な管理が必要です。枝は固くて折れやすいので、誘引を行う時には慎重に作業を行ってください。側枝はあまり長く利用できないため、できるだけ早めに更新を行ってください。

いずれの品種も主枝・亜主枝の先端については1/2程度切り返して新梢伸長を促し、し

っかりとした骨格の形成を行ってください。若木の間は間引きせん定を中心として、主枝・亜主枝の競合枝をつくらないことを意識しながら枝を配置しましょう。成木については側枝の更新を課題として安定生産につなげてください。

## カキ

カキのせん定の時期については、1月に入ってから実施してください。

せん定の際はカキの樹の習性をおさえておきましょう。

1. 切れば伸びる。
2. 先端の枝が一番伸びる。
3. 枝の先端付近から出た新梢に雌花が着く（図6）。

4. 日当たりを好む

### ○主枝・亜主枝先端

まず、主枝・亜主枝の先端から取りかかります。ここは樹の中で最も強く維持したい部分なので着果させず強い枝を伸ばすため切り返しせん定を行います。樹齢の進んだ樹では新梢の発生が少なくなるため、主枝・亜主枝先端部の更新を行ってください（図7）。

### ○結果母枝の扱い

主枝・亜主枝先端以外は基本的に間引きせん定を行います（図8）。雌花は結果母枝の先端および2,3芽から出た新梢に着生するため、結果母枝はそのまま残します。（ただし、西村早生では結果母枝を半分程度まで切り返すことによって雌花の着生が多くなります。）結果母枝が直立していると着果する果実が小玉になる傾向がありますので、大玉生産のためにはなるべく水平方向の枝を選んでください。

### ○側枝の更新

側枝についても長く使い過ぎると新梢の伸びが悪くなるため4～5年を目安に基部の陰芽を残して切り返し、更新してください。

### ○徒長枝

主枝の背面から伸びだした徒長枝は基部から剪除しますが、周りに側枝がない場合にはなるべく弱い枝を選んで誘引し、着果させることも可能です。

### ○受光体勢の改善

葉が大きいカキは日陰部分では枝が枯れ込み、陰芽の動き出しもみられません。樹冠内に十分に日が当たるように内向枝、交差枝は剪除して、新梢の伸び出した時の樹形を考えたながら適切な位置に枝を配置してください。

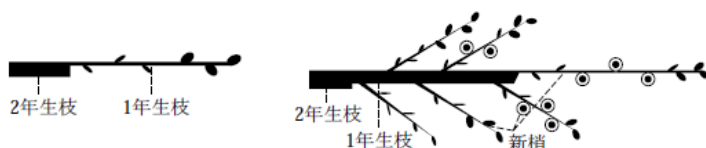


図6 カキの雌花の着生位置

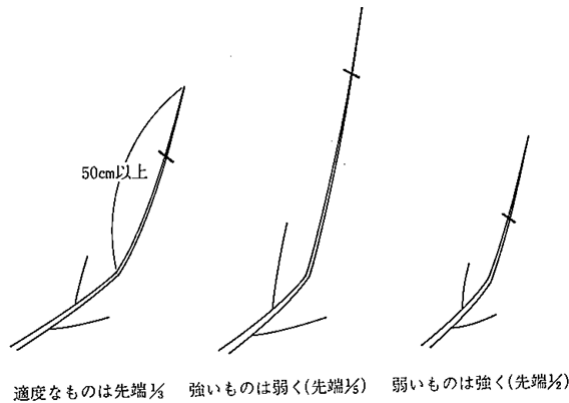


図7 主枝・亜主枝先端の更新

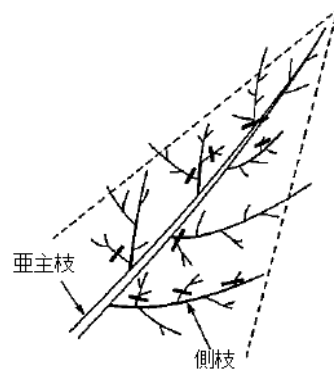


図8 カキのせん定例

### キウイフルーツ（ヘイワード）

キウイフルーツ（ヘイワード）のせん定は数年前から発育枝の更新せん定が中心になっています。この方法は主枝や亜主枝上に発生した更新枝を利用するもので、今年着果した枝は基本的にすべて除去します。せん定自体は単純になりますが夏期の新梢管理を十分に行い、更新枝の充実を図ることが大切です。このせん定方法は荒せん定と仕上げせん定に分けて行くと効率的に行えます。

側枝利用のせん定は基本的には一文字整枝が主体となっています。しかし、負け枝現象が激しいため、主枝、亜主枝、側枝のバランスをとりながら、充実した結果母枝を残していく必要があります。そのためには古くなった側枝は早めに更新し、結果母枝が主枝から離れないように注意して行います。

せん定はまず荒せん定から行います。先端が巻いている枝は巻いている部分まですべて切り戻します。2.5m以上の長大な徒長枝は更新枝として利用する以外はすべて切除します。弱い枝は果実肥大も悪く、よい結果母枝にはならないので、予備枝として利用するもの以外は切除します。

結果母枝は節間がつまりよく充実したものを中心に残すようにします。短い枝は2～3芽で切り返し、更新用の結果母枝をつくる予備枝として利用します。また、不定芽も誘引して充実させることで結果母枝として利用できます。80～120cmの充実した枝を棚にまんべんなく配置することが大切です。キウイフルーツは樹液の流動が早いので、せん定は1月にはすべて終了するようにしてください。